

# つどい

第 249 号  
08.11.1

発行・豊中歴史同好会  
責任者 山口久幸  
豊中市岡町北二―八―十一  
(山口久幸宅)  
電話 (06) 六八五七―四九五九

## 鴨集団と四世紀末の争乱

堺女子短期大学学長 塚口義信



はじめに

御所市を中心とした葛城南部には、どのような政治集団が盤踞していたのであろうか。『古事記』『日本書紀』(以下、『記』『紀』)と略

す)をはじめとする文献史料によると、五世紀代には葛城集団が盤踞し、巨大な勢力をふるっていたと考えられる。

ところが一方、葛城南部の神社を調べてみると、鴨氏の神社が三社(鴨都波八重事代主命神社・御所市御所宮前町、鴨山口神社・同櫛羅、高鴨阿治須岐託彦根命神社・同鴨神)も鎮座し、かつてのある時期には鴨集団も有力な政治集団として葛城南部で勢力をふるっていたと考えられる(図1を参照)。

では、これら二つの集団は葛城南部において、どのような関係にあったのか。それを探るのが、

鴨集団と四世紀末の争乱 塚口義信

杏雨書屋の紹介 (会員) 石塚一郎

南葛城・御所の史跡を訪ねる (会員) 阪口孝男

今回の講演の主たる目的である。もとより一つの推論にすぎないが、文献史学と考古学の両面からその実相に近づいてみたいと思う。

### 一、葛城集団の台頭

『記』『紀』によると、葛城氏(氏)の成立は五世紀後半以降と考えられているので、正確には「葛城氏およびその前身の一族」とでも言うべきであろうが、ここでは仮に、このように言っておく)の大族長であった葛城襲津彦は、四世紀後半に日本の対朝鮮外交で活躍した將軍の一人であり、また、その娘の磐之媛は仁徳天皇の皇后(大后)となつて、のちの履中・反正・允恭の三天皇を生んだと言う。さらに、履中天皇は襲津彦の孫にあたる黒媛を娶つて市辺押羽皇子をもうけるが、その子の意豆・袁豆二王は清寧天皇亡きあと相次いで即位

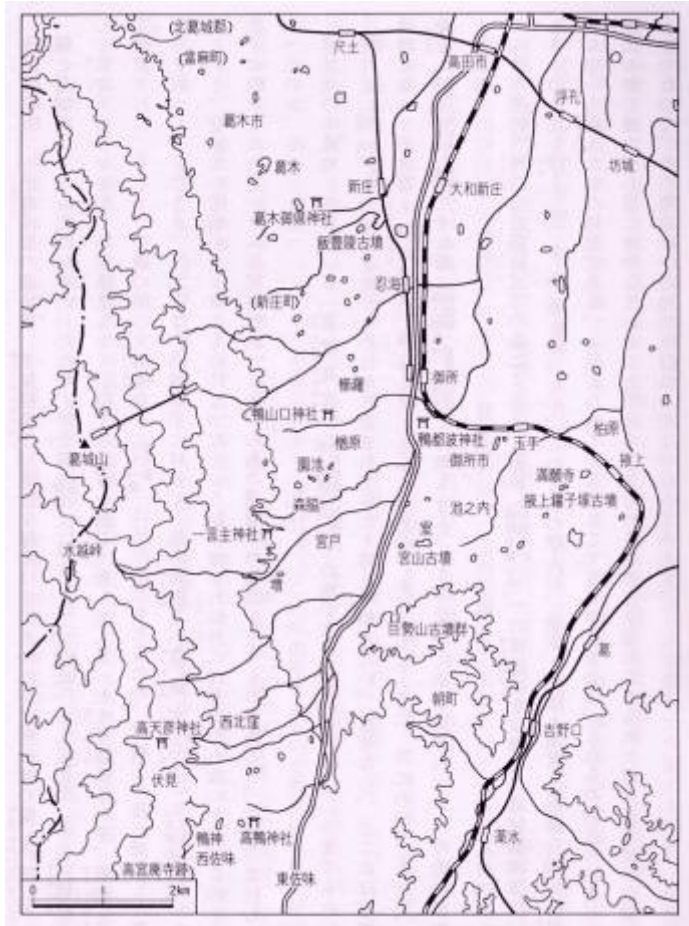


図1 葛城南部の鴨氏・葛城氏関係図  
(注) ( ) は旧行政地名

し、顕宗(袁豆王)・仁賢(意豆王)の両天皇に  
なつたと伝えられる。このように葛城氏は、対  
朝鮮外交で活躍する一方、五世紀代の大王  
家の外戚として、大いにその権勢をふるつてい  
たのである。

ただし、ひとくちに葛城氏と言っても、実は、  
そこにはいくつかの系統の葛城氏が存在してい

た。少なくとも『記』『紀』による限り、次のふ  
たつの系統の葛城氏が存在していたと考えら  
れる。ひとつは、「襲津彦」――玉田宿禰  
(襲津彦の子とする所伝もある)――円大臣  
の系統であり、他のひとつは、「襲津彦」葦田  
宿禰――蟻臣――萑媛」の系統である(図2を参  
照)。

葛城南部と深い関わりを持っていたのは前  
者の系統の葛城氏であり、葛城地方最大の前  
方後円墳として著名な①室宮山古墳(室大  
墓古墳・墳丘長約二四六メートル・五世紀初  
頭)や②掖上罐子塚古墳(墳丘長約一五〇メ  
ートル・前方後円墳・五世紀中葉)は、この系  
統の葛城氏の族長墓であつたと考えられる。  
おそらく①は葛城襲津彦、②は玉田宿禰の奥  
津城であろう。

## 二、四世紀末の争乱

では、葛城南部の葛城氏は五世紀代になつ  
て、なぜそのような巨大勢力を持つことがで  
きたのであろうか。それは、おそらく四世紀  
末の争乱が契機になつていると考えられる。

私は別稿で、四世紀末に、争乱が勃発した  
ことを提起した。それによると、日向の諸族の  
支援を得て九州から摂津に進軍してきた応  
神の名で語られている政治集団(以下、単に  
応神と記す)は、大和北部から山城南部・近  
江南部・摂津・河内北部を勢力圏とするこ  
ろの、四世紀後半にヤマト政権(畿内政権)の

最高首長権を保持していた政治集団(その奥津城は佐紀盾列古墳群・西群)の正統な後継者である忍熊王の名で語られている人物の軍勢と戦い、これを打倒したのち、大和の畝傍山近傍の軽島の明宮で即位し、「河内大王家」の基礎を築いたと考えられる。私見によれば、応神はもともと山城南部の綴喜(京都府

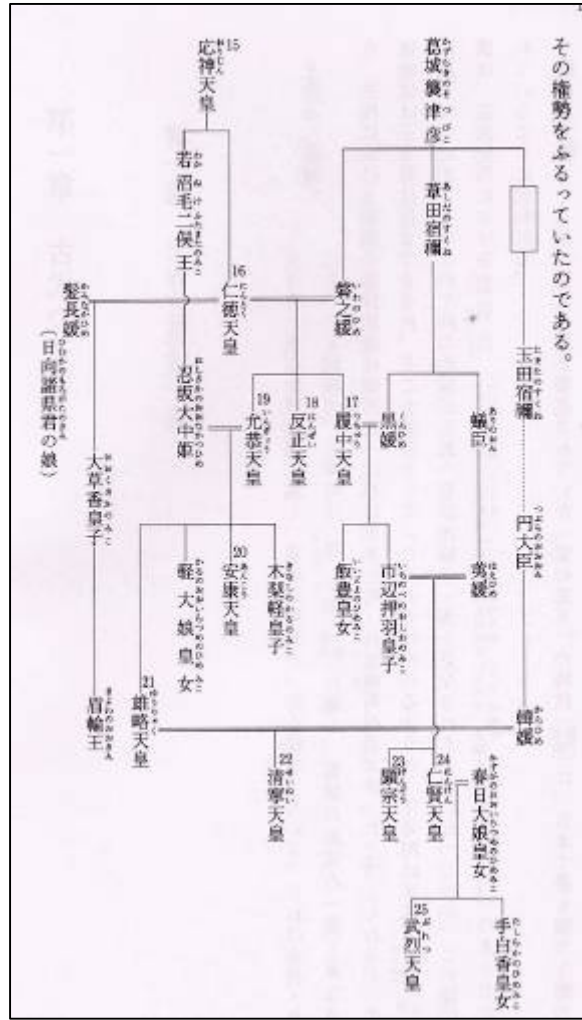


図2 天皇家・葛城氏関係図(4世紀後半～六世紀初頭)  
(注) 数字は『古事記』『日本書紀』による天皇歴代数

京田辺市附近)を本拠とする政治集団の出身で、のちに、古市古墳群の所在する河内誉田地方の一族のもとへ入り婿のかたちで入っていった人物と考えられるから、この争乱の本質は、佐紀盾列古墳群(西群)を築いた政治集団の内部分裂であつたと言つてよい。  
このように、四世紀末に勃発した争乱はヤ

マト政権の内部抗争に端を発しているから、私はこの争乱を「四世紀末の内乱」と呼んでいる。

それはともかく、葛城氏は四世紀末の争乱で勝利した応神方に荷担していたので、五世紀代になると台頭し、大王家の外戚として繁栄することができたと考えられるのである。

では、葛城氏が台頭する五世紀以前の葛城南方で勢力を有していたのは一体、どのような政治集団であつたのか。それを直接に示している文献史料は、ほとんどない。そこで、ここでは視点をかえて、古墳の在り方からこの問題に迫つてみたい。

三、鴨都波一号墳と鴨都波遺跡

葛城南郡における五世紀以前の築造と推測される主な古墳は、およそ以下のものである(図3を参照)。

- ①寺口和田 13号墳(葛城市)

円墳(径約五〇メートル)。主体部は粘土槨。勾玉・管玉・ガラス玉・刀子形石製品・棺金具・刀・鏃・斧・巴形銅器などが出土。

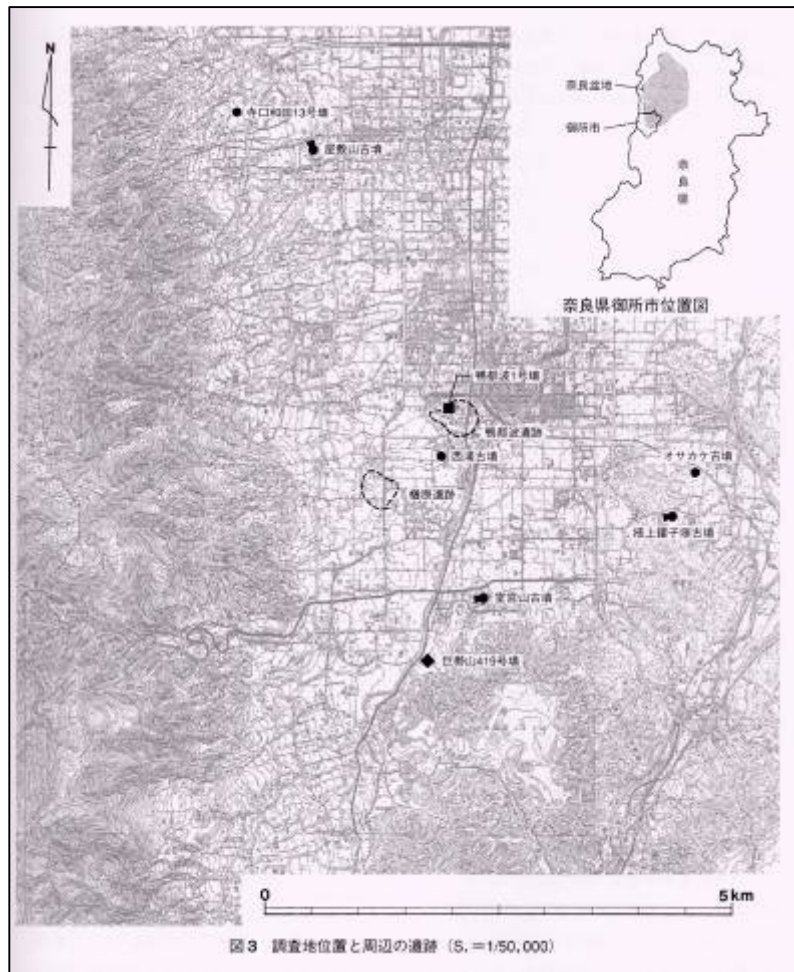


図3 調査地位置と周辺の遺跡 (S. =1/50,000)

埴輪・葺石を有する<sup>4</sup> 墳輪・葺石を有する。四世紀後半の築造と推定される。

②西浦古墳(御所市)

円墳(径約二四メートル)。主体部は粘土槨。細線式獣帯鏡・筒形銅器・勾玉・刀

剣等が出土。四世紀後半の築造と推定される。

③オサカケ古墳(同右)

島本一の「琴柱形石製品の事例」(『考古学雑誌』第二八巻第六号、一九三八年)で

は前方後円墳かとされているが、当地域には前方後円墳が見当たらないので、数基存在する円墳の一つかとも言われている。主体部は粘土槨か。鏡・刀剣・勾玉・石製合子・車輪石の出土が伝えられる。

④巨勢山四一九号墳(同右)

方墳(一辺約一一メートル)。主体部に舟形木棺を直葬し、棺内より短剣一本が出土。埴輪を有する。

⑤鴨都波一号墳(同右)

方墳(南北約二〇メートル、東西約一六メートル)。周囲に幅三〜五メートルの隍が巡る。主体部は粘土槨。出土遺物は多量の布留式土器のほか、以下のものが出土し、四世紀中葉の築造と推定される(図4を参照)。

《棺内》

棺内鏡(三角縁神獸鏡) 1・漆塗杖状木製品 1・緑色凝灰岩製紡錘車形石製品 1・玉類(硬玉製勾玉 5・碧玉製管玉 8・ガラス小玉 44)・鉄剣 1

《棺外》

棺外東 鉄刀2以上・矢箭(鉄鏃)10・漆塗  
 軛1・漆膜(盾?)1・碧玉製大形  
 紡錘車形石製品1  
 棺外西 棺外鏡(三角縁神獸鏡)3・方形板  
 革綴短甲1・漆塗軛1・矢箭(鉄  
 鏃)25・槍2・

南小口 板状鉄斧1・有袋鉄斧2・鉄劍4  
 以上・鉋5程度・不明鉄製品1  
 ⑥ 鴨都波二号墳(同右)  
 方墳(一辺約八・五メートル)。多量の布  
 留式土器が出土。  
 ⑦ 鴨都波三号墳(同右)

方墳(一辺約一〇数メートル)。緑色凝  
 灰岩製の管玉や布留式土器が出土。  
 ⑧ 山本山古墳(同右)  
 前期の前方後円墳の可能性があると  
 も言われているが、詳細は不明。四世紀代の  
 築造と推定される。

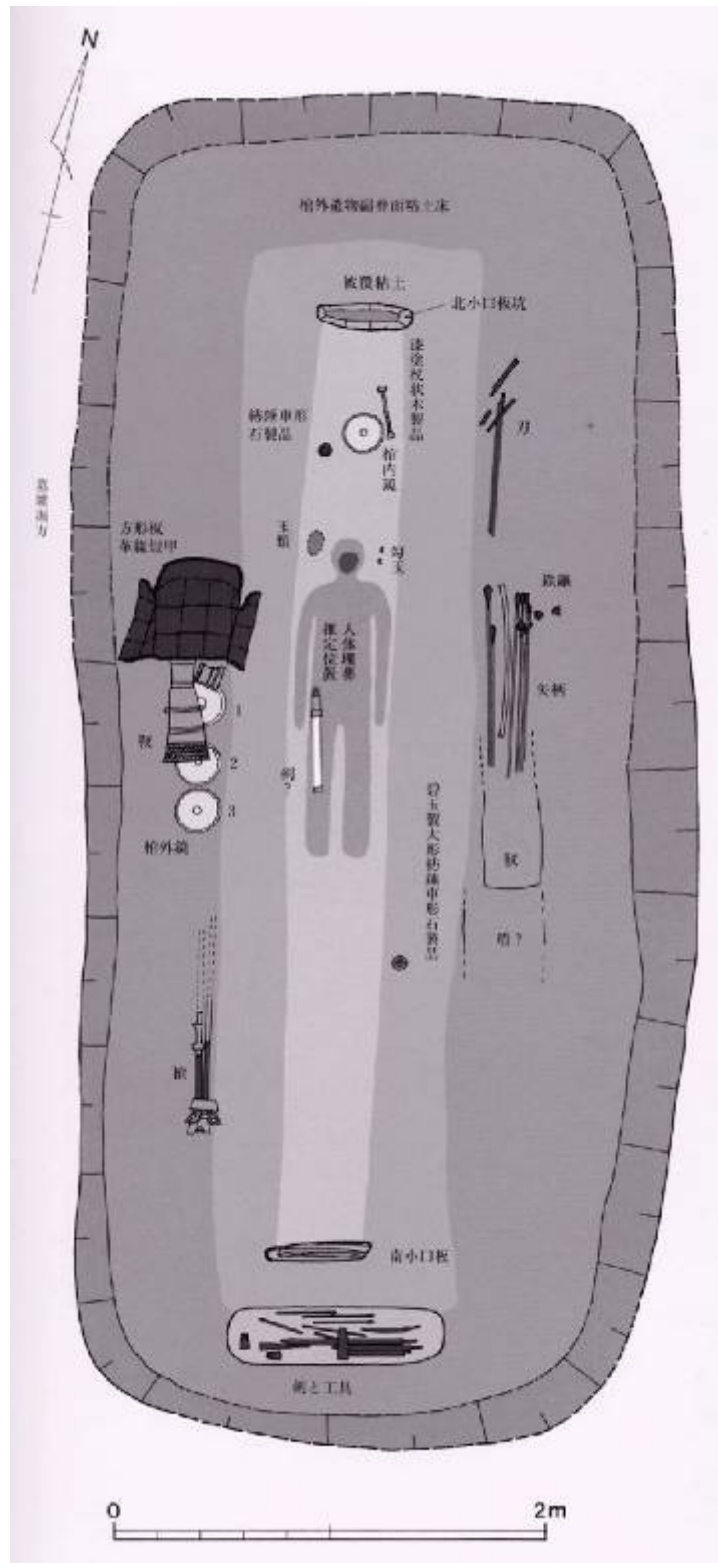


図4 副葬品出土状況模式図

以上のように、葛城南部の地域では前期の大型古墳は見当たらず、五世紀初頭に出現する室宮山古墳との格差は決定的である。しかし、出土遺物に目を転じてみると、三角縁神獣鏡をはじめとする豪華な副葬品を有していた⑤鴨都波一号墳の存在が注目される。この古墳は済生会御所病院の増築工事に伴って、平成十二(二〇〇〇)年一月から九月にかけて御所市教育委員会によって調査されたものだが、その副葬品は四世紀代の葛城南部において群を抜いている。したがってこの古墳の被葬者は四世紀代の葛城南部の地域における、最高級の有力首長の一人であったと考えられる。では、それはどのような政治集団の首長であったのか。

この疑問を解く手がかりは、その所在地にある。この古墳は、実は弥生時代の拠点的大集落として知られる鴨都波遺跡(南北約五〇メートル、東西約四五〇メートル)の西北端に位置しているのである(図5を参照)。⑥⑦や⑧も同様で、おそらく②もこの遺跡と関係

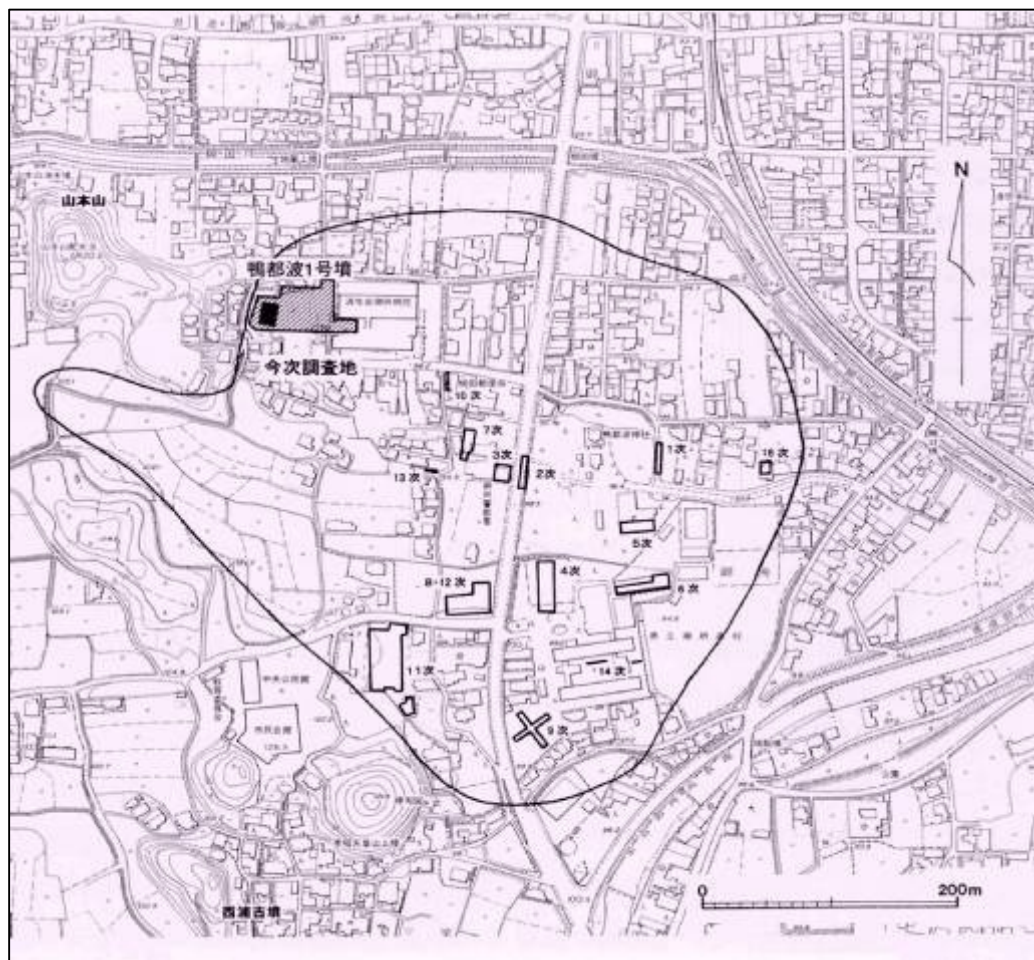


図5 鴨都波遺跡と鴨都波1号墳

しているものと思われる。では、鴨都波遺跡と深い関わりを有するこれらの古墳の被葬者たちは、どのような集団に属していたのか。それはこの遺跡上に鴨都波八重事代主命神社が鎮座していることから知られるように、鴨集団であつたと考えられる。

以上の古墳とともに見逃せないのは、径約五〇メートルの規模を持つ①寺口和田13号墳である。この古墳の被葬者もまた鴨集団の首長とともに四世紀代の葛城南部における首長層を形成していた人物であつたと考えられるが、ここで注目されるのは、この地域の古墳が五世紀代になると急速にその規模を縮小していることである。こうした古墳の在り方は鴨集団のそれと共通し、五世紀代には巨大な葛城集団に従属する一集団となつていたことが推測される。

これを要するに、四世紀末前後の時期に葛城南部の地域では、鴨・寺口和田らの集団から葛城集団への首長交替があつたと推測されるのである。

#### 四、鴨集団の服属神話

鴨集団のヤマト王権の服属を語る神話が、『紀』神代下(第九段の一書の第二)に記されている。

是に、大己貴神報へて曰さく、「天神の勅教、如此慰勸なり。敢へて命に従はざらむや。吾が治す顯露の事は、皇孫當に治めたまふべし。吾は退りて幽事を治めむ」とまうす。乃ち岐神を二の神に薦めて曰さく、「是、當に我に代りて從へ奉るべし。吾、將に此より避去りなむ」とまうして、即ち躬に瑞の八坂瓊を被ひて、長に隠れましき。故、經津主神、岐神を以て郷導として、周流きつつ削平ぐ。逆命者有るをば、即ち加斬戮す歸順ふ者をば、仍りて加褒美む。是の時に、歸順ふ首渠は、大物主神及び事代主神なり。乃ち八十萬の神を天高市に合めて、帥るて天に昇りて、其の誠款の至を陳す。時に高皇産靈尊、大物主神に勅すらく、「汝若し國神を以て妻とせば、吾猶汝を疏き心有りと謂はむ。故、今吾が女三穗津姫

を以て、汝に配せて妻とせむ。八十萬神を領めて、永に皇孫の爲に護り奉れ」とのたまひて、乃ち還り降らしむ。

この神話では、大物主神が帰順した首領の中心の神として記されているが、これは後代の改変によるものであろう。神話のなかで、三輪山から遠く離れた高市御県坐鴨事代主神社(樞原市雲梯町の河俣神社に比定される)が鎮座する高市郡(天高市)に八十萬の神が集められたと語られていることからすると、この神話の本来の形は事代主神のヤマト王権の服属を語るものであつたと考えられる。

とすると、その時期は四世紀末前後であつたとみるのが、考えられる限りにおいて最も自然である。なぜなら、畝傍山近傍の地を制圧し、そこに初めて宮居(輕島豊明宮)を営んだのは四世紀末の争乱に勝利した、『記』紀にホムダ(夕)ワケノミコトの名で語られている応神であつたからである。

一方、その応神と四世紀末の争乱の史実を背景として成立した「原神武伝説」により近い

『紀』の神武の伝承は、別稿で考察したように、事代主神服属神話と不可分の関係にある。神武が事代主神の娘を后（おとこ）にしたと伝え、また神武や事代主神の血を引く綏靖・安寧・懿徳（い）の各天皇の陵墓が高市御県坐鴨事代主神社の鎮座する畝傍山近傍の地に営まれたと伝えられているのも、事代主神を奉斎する鴨氏との関わりから生じてきたものである。してみると、その時期は「原神武伝説」が形成された四世紀末～五世紀前半を以て他には考えにくい。

このようにみえてくると、四世紀末の争乱によつてその権力の座を追われた葛城南部の鴨集団らの神々も、高市郡の鴨集団の神とともに王権に服属した「八十万の神」のなかに含まれていたとみるのが妥当である。そして事代主神がその後もなお王権の直轄領たる高市御県のなかに鎮座していることからすると、四世紀末の争乱のち王権に服属した高市郡の鴨集団はその後、神話が語っているように「永に皇孫の爲に護る」神、すなわち王権を守護する神に変貌していったことが考えられ

る。事代主神が『出雲國造神賀詞』（『延喜式』卷八）のなかで、王権に服属して「皇御孫の命の近き守り神」になつたといひ、また壬申の乱のときに「皇御孫命」（大海人皇子）を守護したというのも、おそらく四世紀末ないし五世紀初頭以来のこうした伝統によるものであろう。

むすび

以上論じてきたことをまとめてみると、次のようになる。

(一) 古墳の在り方から考えると、四世紀末前後の時期に葛城南部の地域において、鴨・寺口和田らの集団から葛城集団への首長交替があつたとみられる。

(二) 一方、高市御県に鎮座する事代主神の服属神話や神武の宮居伝承・后妃伝承などを手がかりに、その時期を探てみると、畝傍山近辺を制圧してこの地に宮を構えた応神の時代（四世紀末～五世紀初頭前後）であつた公算が最も大きい。

このようにして、(一)と(二)は、鴨集団らの王

権への服属が四世紀末～五世紀初頭前後の時期であつたという点において、ともに一致する。これは決して偶然ではなく、葛城南部の伝統的勢力を代表する鴨集団は、四世紀末の争乱の結果、ヤマト政権の最高首長の権力を背景として当地域に入植してきた葛城集団に、そのリーダーの座を明け渡したことが推察されるのである。

〔注〕

(1) 塚口「葛城氏の発展と没落」『ヤマト王権の謎をとく』所収、学生社、一九九三年。

(2) 塚口「四世紀後半における王権の所在」(末永先生米寿記念会編『末永先生米寿記念 獻呈論文集』坤、所収、奈良明新社、一九八五年)、「佐紀盾列古墳群とその被葬者たち」(『ヤマト王権の謎をとく』所収、学生社、一九九三年)などを参照。

(3) 以下の叙述は、御所市教育委員会『葛城の前期古墳 鴨都波一号墳』(学生社、二〇〇一年)および藤田和尊氏(奈良県



御所市教育委員会)の御示教に負うところが多い。

- (4)改訂新庄町史編纂委員会編『改訂新庄町史』本編(新庄町役場、一九八四年)、伊藤勇輔・楠元哲夫『日本の古代遺跡6 奈良南部』(保育社、一九八五年)
- (5)塚口〃神武東征伝説〃成立の背景」『東アジアの古代文化』一二二号、大和書房、二〇〇五年)。
- (6)詳しくは、塚口「神武天皇と大物主神」『三輪山の神々』学生社、二〇〇三年)を参照。

〔挿図出典一覧〕

- 図1 王寺町史編纂委員会編『新訂王寺町史』(本文編)(王寺町、二〇〇〇年)
- 図2 〔注〕(1)と同じ
- 図3 〔注〕(3)の報告書
- 図4 〔注〕(3)の報告書
- 図5 〔注〕(3)の報告書



## 杏雨書屋の紹介

(会員) 石塚 一郎

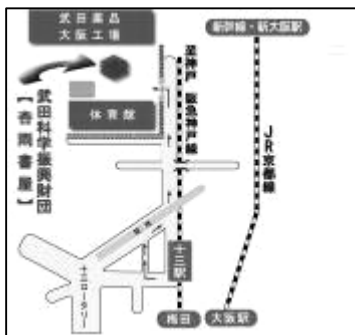
本草を中心とした古典医学書を所蔵する図書資料館が阪急十三駅近くの武田薬品工業の大阪工場・研究所の側にあるのをご存知ですか。その名を杏雨書屋きょううしょといいます。

杏雨書屋は武田家五代目武田長兵衛氏(武田和敬翁)が、一九二三年九月の関東大震災により東京で貴重な典籍が灰燼に帰したことを大いに痛嘆し、日本・中国の本草医学の散逸を防ぐことが、将来、社会・学界のために極めて有意義であると考え、医薬書を中心に機会に応じて収集したことに始まります。

この収集事業は六代目武田長兵衛氏に引き継がれ、歳月とともにその内容も増大しましたが、一九七七年その収集資料が武田科学振興財団へ寄贈され、一九七八年四月二十八日「杏雨書屋」の名称を継承し、本草医学を中心とする図書資料館として開館するに至ったものです。ちなみに杏雨とは杏林(医学)を潤す雨の意であります。

所蔵する資料は、本草を中心とする古典医学書が主ですが、特に幕府御典医の曲直瀬家、幕末に日本最初の化学書『舍密開宗』を著した宇田川榕菴ようあんを輩出した津山藩医の宇田川家伝来本をはじめとする、多数の国宝・重文を含む日本医学史に関する膨大なコレクションで、その質・量は東洋一といわれています。

今、秋の特展で展示された「杏雨書屋の洋書」の多くがそのまま展示(明年三月頃まで)されています。



開館：月～金（祝日を除く）  
9時～16時  
Tel 06-6300-6815